

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。() は問題作成者が追記した個所である。

ある年の三月上旬、文学系学科の事務室で、筆者〔町田祐一…日本大学教員、日本近現代史研究者〕の演習科目を受講していた学生と偶然会った。その日は卒業に関する書類を受け取るために事務室に来たという。

つい、「今年卒業だね、おめでとう。進路は決まった？」と声をかけると、学生は、「はい。地元の県の公共団体へ就職が決まりました」という。この学生は普段授業でよく発言をしていたので、大変よい点数をつけたことを覚えていた。就職もそうした積極性が一つの決め手になったのである。そういえば、筆者の同期の卒業生も同じ団体へ就職していたことを思い出し、しばらく話が弾んだ。これだけなら、よくあるキャンパスの光景であろう。

その学生と別れて数分後、別の学生と会ったので、やはり同じことを聞いてみた。するとこちらの学生は少し困った顔をして、それでも笑顔でこう言った。

「実はまだ就職決まってないんです。明日も面接に行きます。就職難です」

この学生はさっきの学生ほど活発な印象ではないが、授業態度も成績もよかった。そのため、この言葉は意外であった。筆者は一瞬言葉に詰った。するとその学生は矢継ぎ早に質問を投げかけてきた。自分は就職に向いていないのではないか、営業は難しいのではないか、就職できなかったらどうすればいいのか、そして、「就職」って何であるんですかね、と。

返答に窮してしまった筆者は、自らの研究者世界の厳しい就職事情や、様々な知人の話をした。ついでに昔の就職難の話として、卒業後一定の職業に就いていない「高等遊民」(中学卒業程度以上の学歴で一定の職業に就いていない人)の事例を話したり、職業紹介所で事務員の口を頼んで断られると「事務員でなければ就職せぬ」といった大学卒業生の話をしたりした。するとその学生は落ち着いた表情になり、しばらくして笑顔で帰って行った。かれこれ二時間ほど雑談をしまつていった。よほど悩んでいたか、話し相手がおらずモヤモヤが溜まっていたのであろう。だが、話し終わってから、何かスッキリしないものが残った。

就職とは、紙一重で明暗が分かれてしまう残酷なものである。これらの二人の学生に天と地ほどの大きな差があったとは思えない。だが、どうして片方は就職難という憂き目にあい、自らを否定するまで自己評価が低くなるのか。この二人との会話は、大学卒業生の就職難が常に身近な問題として存在することを改めて思い知らされた出来事であった。

最近〔二〇一六年当時〕の大学院・大学生は、東京オリンピック開催決定、団塊世代の大量退職の影響などによって、就職戦線に明るい兆しが見えてきたとはいえ、二〇〇〇年代の日本社会においては「フリーター」「高学歴ワーキング・プア」などの言葉が生まれたように、就職難はたびたび社会問題となってきた。実際、一流大学を出ても公務員や会社員になれず非正規雇用で働かざるをえない人や、大学院を出て定職に就けていない若手研究者が人文社会系を中心に多いことはよく知られている(水月昭道『高学歴ワーキング・プア』)。こうした人たちの中から、自暴自棄になって自殺したり、反社会的行動を企てる者が出たほか、就職活動そのものに疑問を持ち、反対運動を行う者も出ている(「特集 就活のリアル」)。この他、公平な機会を提供するとうとうエントリ―が、実際は高偏差値の有名大学学生だけを対象化していたという「学歴フィルター」が問題視されたり、採用側が学生の就職活動の終わりを強制してくる「オワハラ」などがある。高学歴者の就職には実に多くの苦勞がつきまといっているのである。〔中略〕

高等教育機関が発達した現代、どの国でも、高学歴を得た人というのは、それだけで社会的にもそれなりのステータスを得られるイメージがある。だが、必ずしもそううまくいかないことは、先の学生の事例からもわか

る。

そもそも、近代日本において高等教育機関は、国家有用の人材を生み出すために設置され、整備されてきたものである。日本では、一八八六（明治一九）年の「学制」により、帝国大学を頂点とする高等教育機関への階梯が整備され、旧士族や大商人・大富豪の子弟を中心に修学の機会が増えていき、苦学生や独学者を裾野に持ちながら年々増加していった。そして、その卒業生たちは、エリートたる官学出身者を中心に、私学出身者ともども、国家機構や産業界、文化・学問など多くの側面で日本の近代化を担う「立身出世」を体現し、今日に至るまで国家社会に大きな役割を果たしてきた。高等教育機関が国家秩序の上層を再生産し、前近代とは異なる新たな階層を形成したことはいうまでもないだろう。高学歴者といえば、それだけで就職先には困らず、順風満帆、人生の成功者という先入観を持つ方が多いと思われる。

だが、就学者が増加してからの様子を見ると、近代日本の決して豊かとはいえない国力と比例するかのようになり、しばしば就職難が社会問題となり、政治課題となってきた。その大きな波は二つ見受けられる。

第一は、日露戦後の明治末期である。この頃、法・文科系の男性を中心にした高学歴者の就職難が発生、一定の職業に就いていない者は、「高等遊民」と称され、時の政治状況から文部行政や警察行政にまで影響を与える社会問題となっていた。

第二は、第一次世界大戦の好景気を挟んで、世界的な不況のあおりを受けた昭和初期である。この時期には、様々な学問分野における男女の「知識階級失業者」（中学卒業以上の学歴の無業者。男性の新卒者については引き続き「高等遊民」と呼ばれた）が深刻な問題となり、やはり政治社会に影響を与えている。いずれも不況期に特に重要な社会問題と目されたことが特徴である。〔中略〕

こうした過去の事実は、意外に知られていない。高学歴者だからといって、すべての人が就職に困らず、思う通りの高いステータスを得られたわけではないし、幾重にも重なった矛盾があり、葛藤があった。国家の期待と責任を背負った政治家や軍人、官僚エリートばかりが注目される日本近代史ではあるが、その周りには、*「就職に苦労した高学歴者たち」*も大勢いたのである。

（町田祐一『近代日本の就職難物語―「高等遊民」になるけれど』吉川弘文館、二〇一六年）

問一 右の文章を二〇〇字程度で要約せよ。

問二 右の文章を踏まえて、自身の「将来」と、大学での「学び」について（大学で何を学びたいか）、あなたの考えを六〇〇字以内で述べよ。